

## 報告要旨

### 東洋学からオリエンタリズムへの射程 —インドの音楽芸能研究を事例として—

井上貴子(大東文化大学)

#### 1. 『オリエンタリズム』をめぐる議論

サイードの『オリエンタリズム』(Said, 1978、以下、原著の出版年を示す)は、主に西アジアについて論じたものであった。しかし、特に、アジアがヨーロッパの「想像」によって歴史的に構築されたという点、オリエンタリストの営為と植民地支配の拡大とが政治的・イデオロギー的に密接に結びついている点が明確に指摘されているために、長期にわたって英領下にあり、いわゆる西洋との関係が常に問われてきた南アジアでは、文学・人類学・歴史学をはじめ多くの研究者の注目を集めることになったのである。1980年代になるとサイードに触発された研究が数多く出版されるようになった。なかでも、植民地における国家と社会との関係について論じた人類学者のコーン(Cohn, 1997)、インドとヨーロッパの関係を哲学的側面から分析した宗教学者のハルフファス(Halbfass, 1988)、啓蒙以降の本質主義的「ヒンドゥー」観を批判的に論じた歴史学者インデン(Inden, 1990)らの研究は代表的なものである。

一方で、『オリエンタリズム』に対する批判も数多く出された。宗教を切り口としてオリエンタリズムからポストコロニアルへの理論的展開について論じたキング(King 1999)の論考には、これまでに出版された批判が手際よくまとめられている。まず、サイードはフーコーに依拠しながら理論的一貫性に欠けるという点は、多くの研究者が指摘するところでもある。特に「言説」については、フーコーは「西洋」のエピステーメを16～18世紀の近代国家の成立を前提とするが、サイードは古代ギリシアにまで言及することで「西洋」を本質化しているという批判がある。さらに「表象」について、サイードはフーコー的な「表象」と反表象的人道的立場の間でゆれ動いており、オリエントのオルタナティヴを拒否しながら人道的立場に基づくオルタナティヴを示唆しているという批判がある。第二に、サイードは自らの記述の整合性に変更をせまるような事例に言及していないとの指摘がある。たとえば、ドイツのように東方に植民地をもたない帝国のオリエンタリズムや、日本のように植民地化されなかった東方へのオリエンタリズムがその事例として挙げられる。第三に、ネイティヴの反応についての言及がなく、ネイティヴの受動性が強調されているという批判である。しかし、これについては『文化と帝国主義』(Said, 1993)の中である程度まで補完されることになった。第四に、肯定的共感的オリエンタリズムの立場に基づくもので、ネイティヴによってオリエンタリストの言説は流用されてきたのであり、サイードの分析はオリエンタリズムに極端に否定的で一面的だという批判である。しかし、この種の議論は、ともすると植民地支配を肯定的側面から捉える修正主義に陥りやすいことを意識すべきだろう。最後に最も問題をはらんでいるのが、文化的政治的に中立な「近代化」と西洋の優位性によって裏書きされた「西洋化」との関係の記述が不十分だという批判

である。端的に言えば、近代化と西洋化は常に一体ではなく、電気が通ったからといって即西洋化するとは限らない。この点については次節でも取り上げる。

その後、南アジア研究者を中心に、主にフーコーの「知と権力」、グラムシの「ヘゲモニーと抵抗」に触発されて、サバルタン研究やポストコロニアル研究へと理論的展開がなされたことは特筆すべきである。そこでは、文学・人類学・歴史学等の研究者、植民地支配者、ナショナリストの三者間におけるインド理解をめぐる関係性、植民地ヘゲモニーと植民地社会で自ら選択的に行動するエージェンシーとの関係性、政治的領域におけるオリエントとオクシデントの構築と展開、自己の構築における他者との相互依存性あるいは共犯性とその性格などに注目が集まった。また、サイド自身も、分析方法として対位的読解(Said, 1993)を提示し、ポストコロニアル理論に重要な貢献をなした。南アジアの主要なポストコロニアル研究としては、植民地支配者とナショナリストの共犯関係の背後に潜む不在としてのインドを描いたスレーリ(Sureli, 1992)、西洋の生み出した二項対立的思考を批判し、文化の雑種性と言語の多義性について論じたバーバ(Bhabha, 1994)、脱構築的読解に基づく現状への政治的介入とその理論的支柱として戦略的本質主義について論じたスピヴァック(Spivak, 1999)などがある。

## 2. オリエンタリズムからポストコロニアルへ

では、南アジア研究者の間では、オリエンタリズムからポストコロニアルへの流れのなかで、どのような側面から理論的整備がなされ、分析方法が深化していったのか。そこで注目されるべき課題とはどのようなものなのか。これについては、ブレッケンリッジらの編による論集(Breckenridge & Veer 1992)が比較的好くまとまっていると思われるので、それに基づいて述べることにする。

まず、最も重要な展開は、植民地支配の言説と実践との架橋が目指されるようになったことである。特に、植民地住民の歴史的表象とそれに付与された他者性(ジェンダー、人種、階級、カースト等)の問題、植民地世界の地政学的概念化と植民地支配の実践(行政、司法、経営等)との関係、東洋学者によるインド文明の発見が主にバラモン男性の世界観に基づいてなされたという点、東洋学者の研究方法としての経験主義が客観的科学的な方法として制度化された点、植民地支配者と被支配者との共犯関係によって築かれたインドの表象のあり方、サバルタンの反応と抵抗、内的オリエンタリズム、すなわち、独立インドの植民地支配者なき統治とオリエンタリズムとの関係の解明が重要な課題となっている。

第二に、オリエンタリズムとナショナリズムの関係が注目を集めたことである。すなわち、まずは、いかにしてオリエンタリズムがナショナリズムへと転化したのかを明らかにすることが重要な課題となる。さらに、ドイツのように、オリエンタリズムの成果がヨーロッパのナショナリズムの形成に波及的効果を及ぼす事例もある。また、独立後のトランスナショナルな地勢におけるオリエンタリズムの影響や、そのような地勢における移民のナショナリズムと移民先住民との関係の解明も重要な課題となってくる。

第三に、モダニティとオーセンティシティの関係である。ここでは、文化的アイデンティティ構築の過程の解明が重要な課題となる。文化的アイデンティティは、自己と他者との関係、すなわち、インサイダーの視点とアウトサイダーの視点との相互参照によって、多様に構築されていく。そもそも、現代に流通するインドについての基礎知識の構築は、オリエンタリズムの成果に大きく依存していることは否めない。さらに、南アジアのような多言語社会では、他者の言語であったはずの英語と自己の言語であったはずの現地語との関係も複雑に交錯する。モダニティとオーセンティシティは決して完全に排他的なものではなく、その相互参照性あるいは共犯性にも注目する必要がある。

最後に、オリエンタリズムとその歴史と社会科学との間の相互関係について検証することが、とりわけ困難な課題となる。先のサイド批判のところでも言及したように、社会科学理論における「近代化」とオリエンタリズムとは実に相性が悪い。しかし、現代社会に生きる我々は、ヨーロッパで育まれた知の体系に基づく学術用語を用いてインドを語る、あるいは語らざるを得ないというジレンマに直面している。一方、オリエンタリズムを超えた「現代」の分析への学術的要請は、今後も高まることはあれ、なくなることはないだろう。このような状況のなかで、我々はいかに語るができるのか。あるいは語るべきなのか。この課題を容易に解くことはできないが、決して忘れてはならないだろう。

### 3. 音楽芸能研究における「オリエンタリズム」

文学・美術等の他の芸術分野に比較して、「オリエンタリズム」の音楽芸能研究への適用は極めて遅かった。その主たる理由は、自律的領域としての「芸術」神話の存在である。特に音楽は、文学・美術など他の芸術に比較して抽象性が高いとみなされ、鳴り響くテキストの特殊な手法に基づく内在的な分析の慣習が強く、政治・社会と切り離れた研究が中心だった。この点は、直接オリエンタリズムについて論じてはいないが、サイド(Said, 1991)も指摘している。もう一つは、オリエンタリズムの用法の問題である。東洋趣味の系譜が西洋音楽を触発し語法の拡大に貢献したことへの礼賛から、知と権力との相互依存関係やヘゲモニーに着目した研究が生まれにくかった。

しかし、近年ではサイドに触発された研究も生まれつつある。マッケンジーの論考(Mackenzie, 1995)はこの種のものとしては最も早い時期に書かれた。彼は反サイド、肯定的共感的オリエンタリズムの立場から、「オリエンタリズム」を文化的相互参照と捉えることによる意味の拡張を試みている。しかし、その内容は、東洋の音楽語法がいかに西洋音楽を豊かにしたかを論じるもので、彼の意図とは逆に「不在としての東洋」が浮き彫りになっている。一方、クレイトンらの編による論集(Clayton & Zon, 2007)は、オリエンタリズムの歴史に東洋との出会いから表象までを位置づけ、オリエンタリズムからポストコロニアルへの理論的展開をふまえた画期的な論集である。ここでは、音楽におけるオリエンタリズムの原理的な形式と市場における受容、音楽叙述・舞台・映画音楽におけるオリエンタリズムの表象、西洋の観衆のもつ東

洋への消費のまなざしなどが論じられている。

拙著『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』(井上、2006)の前半部分は、鳴り響く音楽のテキスト分析の手法としての音楽学の成立と制度化に着目し、オリエンタリズムを射程に入れて論じたものである。音楽学を取り上げた主たる理由は、東洋学の一環としてインド音楽の学術的研究が開始されたこと、サイドは東洋学という学問的営為とそれに基づく知の制度化を第一の問題にしていること、音楽学の成立には「知と権力」「ヘゲモニーと抵抗」という側面が端的に現れやすいことである。具体的には、18世紀末から1947年の印パ分離独立前後までの時代を、東洋学の時代、すなわち東洋学者(オリエンタリスト)によるインド音楽の学術的研究の開始の時代と、19世紀末以降の比較音楽学の時代、すなわち録音技術の確立と科学的な音楽分析方法によって東西の音楽の比較分析が行われるようになった時代とに分けた。さらに、比較音楽学の時代の後半期に、19世紀ヨーロッパで成立した音楽学の影響を受けつつ成立した新しいインド音楽学について、南インドを事例として論じた。最後に、独立後の文化政策と題して、このような過程を経て成立したインド音楽学の成果と、そのなかで構築されたインド音楽観に基づいて策定された文化政策について論じた。

東洋学の時代では、まず、在印ヨーロッパ人によるインド音楽へのアプローチとしてヒンドゥスターニー・エア、インド人による西洋音楽へのアプローチとしてタンジョール・バンド等、東西の音楽文化の出会いと相互の受容について論じた。次に、ベンガル・アジア協会の創設者ウィリアム・ジョーンズらによるインド音楽の学術的研究が、サンスクリット語文献を称揚し、その解釈に基づき、比較言語学を応用しながら、インド音楽と古代ギリシア音楽との類似性あるいは異質性に関心を寄せたこと、さらに、ヒンドゥーによって築かれたサンスクリット音楽文化がムスリム支配によって衰退したと捉えたことを指摘した。次いで、S. M. タゴールをはじめインド人によるインド音楽研究と東洋学との関係について論じ、特にインド式記譜法の維持か五線譜の受容かという記譜法をめぐる対立が、高等教育への英語の導入をめぐるオリエンタリストとアングリシストの対立と平行であることを指摘した。ただし、英語教育は導入されたが、五線譜は受容されなかった。また、インドの音楽文化の多様性が捨象されて一律に「ヒンドゥー音楽」という枠組みで捉えられたこと、これによってヒンドゥー音楽とそれ以外の音楽との境界がインド人知識人の中で徐々に内面化されていったこと、このような動きに対し、特に南インドでは自らの音楽伝承の正統性を主張する動きが生まれたことを指摘した。

比較音楽学の時代では、まず、比較音楽学の成立とインド音楽研究への応用について論じた。比較音楽学の成立は、録音技術の発達によって社会的・文化的文脈から鳴り響く音のテキストを切り離すことが可能になり、エリスのセント法(1オクターヴを1200セントとする音律の記述法)を応用して、音のテキストを内在的に分析する方法が確立したことによって特徴づけられる。こうして、比較音楽学者は「科学的」「客観的」なインド音楽研究をめざし、特に、音律(シユルティ)や音階(ラーガ)に注目し、西洋音楽との詳細な比較に関心を寄せた。次に、全インド音楽会議の開催とインド人の音楽研究について論じた。インド各地で開催された会議の多くは、音楽教育の導入とそのための音楽理論の標準化を目指した。また、高まりつつある民族運動と

連動しながら、南北の音楽文化の相違を認識しつつ統一へ可能性が模索された。すなわち、この時代に至って、オリエンタリズムはナショナリズムに転化していくことになる。

新しいインドの音楽学では、1920年代末から独立前後にかけて確立された南インドの音楽学を事例として取り上げた。まず、南インド独自の音楽理論の標準化において積極的な役割を果たしたマドラス音楽アカデミーの設立と活動について論じ、政治や社会から独立して保護育成されるべき存在としての「芸術」を掲げた芸術至上主義が、逆に政治的方便として用いられていったことを指摘した。特に、アカデミーに対抗して設立されたタミル音楽サンガムの活動が、反北インド、反アーリヤ、反バラモン、タミル・ナショナリズム的な政治潮流であるドラヴィダ運動と連動し、タミル語による歌のレパートリーが少ないことに対する異議を申し立てに端を発するタミル音楽運動を喚起し、音楽における言語論争へと発展する過程に注目した。さらに、西洋音楽学の影響を受けたインド音楽学の特徴について、科学としての音楽学、シュルティ、ラーガ、記譜法、楽器という五つの側面から論点を整理した。

最後に、独立後の文化政策と音楽学との関係について、中央の文化政策に対するタミルナードゥ州の文化政策を事例として取り上げ、「多様性と統一」という国家理念と地域アイデンティティとの相克について論じた。なお、本書の後半では、具体的な芸能を事例として取り上げ、音楽学の知見に影響を受けて形成された音楽観が、実際の芸能の存続にいかなる影響を及ぼしているのか、芸能の担い手たちはそれに対していかなる反応を示しているのかについて論じた。

以上、今日のインド音楽学の成立には、東洋学に端を発するインドに関する知の制度化が色濃く影響を及ぼしている。しかし、オリエンタリストの示した改良の処方箋は、インド人自身の手によって変更を加えられ、ナショナリズムへと転化する。そして、独立後のポストコロニアルな文脈のなかで、さらに書き換えられつつ実践されていくのである。

## 文献

- 井上貴子 2006 『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』青弓社。
- サイード、エドワード・W 1993 『オリエンタリズム』上下、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー(1986、平凡社)。(Edward W. Said, 1978, *Orientalism*.)
- 1995 『音楽のエラボレーション』大橋洋一訳、みすず書房。(Edward W. Said, *Musical Elaborations*, 1991)
- 1998、2001 『文化と帝国主義』1(1998)、2(2001)、大橋洋一訳、みすず書房。(Edward W. Said, 1993, *Culture and Imperialism*.)
- スピヴァック、G. C. 2003 『ポストコロニアル理性批判—消え去りゆく現在の歴史のために—』上村忠男・本橋哲也訳、月曜社。(Spivak, Gayatri Chakravorty, 1999, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*.)
- スレーリ、サーラ 2000 『修辞の政治学—植民地インドの表象をめぐって—』川端康雄、吉村玲子訳、平凡社。(Suleri, Sara, 1992, *The Rhetoric of English India*.)
- バーバ、K. ホミ 2005 『文化の場所—ポストコロニアルリズムの位相—』本橋哲也他訳、法

- 政大学出版局。(Homi K. Bhabha, 1994, *The Location of Culture*.)
- マッケンジー、ジョン・M 2001 『大英帝国のオリエンタリズム—歴史・理論・諸芸術—』  
平田雅博訳、ミネルヴァ書房。(John M. Mackenzie, 1995, *Orientalism: History, Theory and the Arts*.)
- Breckenridge, Carol A. & Peter van der Veer eds. 1992, *Orientalism and the Postcolonial Predicament: Perspectives on South Asia*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Clayton, Martin, & Bennett Zon eds. 2007, *Music and Orientalism in the British Empire, 1780s-1940: Portrayal of the East*. Burlington: Ashgate Publishing Company.
- Cohn, Barnard S. 1997, *Colonialism and Its Forms of Knowledge: The British India*. New Delhi: Oxford University Press. (1980年代の主要論考を収録)
- Guha, Ranasit, et al. eds. 1982-2000, *Subaltern Studies: Writing on South Asian History and Society*. Vol.1-11, New Delhi: Oxford University Press.
- Halbfass, Wilhelm, 1988, *India and Europe: An Essay in Understanding*. Albany: State University of New York Press.
- Inden, Ronald B. 1990, *Imagining India*. Oxford and Cambridge, MA: Basil Blackwell.
- King, Richard, 1999, *Orientalism and Religion: Postcolonial Theory, India and "The Mystic East"*. London and New York: Routledge.
- Mabilat, Claire, 2008, *Orientalism and Representations of Music in the Nineteenth-Century British Popular Arts*. Burlington: Ashgate Publishing Company.